

現在は

どこにあるか

吉本隆明

新潮社

現在はどこにあるか

新潮社

げんざい
現在はどこにあるか



1994年12月20日発行

著者 よしもと たかあき 吉本隆明
発行者 佐藤亮一
発行所 株式会社 新潮社

〒162 東京都新宿区矢来町71

振替 東京4—808

電話 営業部 (03)3266-5111

編集部 (03)3266-5411

印刷所 大日本印刷株式会社

製本所 株式会社大進堂

© Takaaki Yoshimoto

1994, Printed in Japan

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社読者係宛お送り
下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

ISBN4-10-377902-0 C0096

価格はカバーに表示してあります。

現在はどこにあるか ● 目次

- 1 現在への追憶 7
——荻野アンナ「背負い水」／小川洋子「完璧な病室」／村上春樹「TVビープル」
- 2 反現在の根拠 21
——古井由吉『楽天記』／丸山健二『千日の瑠璃』／村上龍『イビサ』
- 3 物語のゆらぎ 37
——中上健次『軽蔑』／大江健三郎『僕が本当に若かった頃』
- 4 マス・カルチャーからの認識 51
——新井満「尋ね人の時間」／伊集院静『受け月』／新井素子『おしまいの日』
- 5 私小説は悪に耐えるか 68
——車谷長吉『鹽壺の匙』
- 6 輪郭は作れるのか 84
——多和田葉子「ベルソナ」／丸谷才一『女ざかり』
- 7 お伽話の距たり 101
——出久根達郎『佃島ふたり書房』／野中柊『チョコレット・オーガズム』
／山田詠美『ぼくは勉強ができな』
- 8 奇妙な世界に行く 120
——中野孝次『清貧の思想』／遠藤周作『深い河』

9 ビジネス書の内と外¹⁴²

——小沢一郎『日本改造計画』／中上健次『異族』

10 擬人化の世界¹⁶⁰

——多田富雄『免疫の意味論』／リチャード・ドーキンス『利己的な遺伝子』

11 伝記的ということ¹⁷⁸

——樋口覚『一九四六年の大岡昇平』／富岡多恵子『中勘助の恋』

12 自然と死の物語¹⁹⁴

——小川国夫『悲しみの港』／小川洋子『密やかな結晶』

13 詩の順序²¹⁴

——谷川俊太郎『世間知らず』／河野道代『spira mirabilis』／松浦寿輝『鳥の計画』
／萩原健次郎『K市民』／川田絢音『球状の種子』／清水昶『詩人の死』／辻征夫
『河口眺望』／平田俊子『（お）もうい夫婦』／吉増剛造『啞者の家へ』／田村隆一
『七十歳最後の水曜日』

14 経験知の世界²³¹

——宮路年雄『役人といかに喧嘩するか』／落合博満『勝負の方程式』

あとがき²⁴⁸

装幀 野本卓司

現在はどこにあるか

1 現在への追憶

1

「現在」はどんなときなんだろう？　こんな雲を掴むようなことに半ば憑かれて、マス・イメージの世界を素描してから、もう十年になってしまった。マス・イメージをハイ・イメージに置きかえてみたり、文芸をマス・カルチャーぜんぶに拡げてみたり、経済や社会の出来ごとにまで触手をのばしてみたりして、わたしなりの「現在」ドキュメントの記述は、続けられてきた。考えを持続していればそれなりに、どんな課題も薄紙を剥がすようにわかつてくるものだ。そういたいのだが、そんなにくまなく「現在」はつかまえられたわけではない。ただ概していえばここ数年とくに現実の動きの方がめまぐるしく、また波立ちも激しくて物語めいてくる一方で、それを模写し伝播して世界じゅうにふり撒いている情報の姿は、ますますノンフィクションめいてきて

いる。この動きを歴史という作者のつくったおおきな文学の作品とみなせば、一九一七年にはじまった物語が、いま終ろうとして、また別の物語が始まろうとしているところだといつていいとおもう。この「現在」に固執するかぎり文学がこの作品以上面白い作品を描けるわけがないとおもえる。文学はいま、いろいろつらいことをかんがえなくてはならないはずだ。

現実の動きがフィクションとおなじほど興味をそそり、しかも構成の規模もおおきいとすれば、文学作品としてはフィクションをどう作りあげたらいいのか。個々の作家がそれを意識しても、無意識のままでも、さまざまに切実な課題であるにちがいない。文学はいまはじめて、歴史から自由であるよう強迫されている。この強迫された自由を、こんどは歴史という作者のおおきな必然力が追いかけて「現在」を追憶するよう迫っている。こんなはげしくおおきな確執に耐えられるような方法を、文学は手にしていない。どこか歴史の空孔みたいなところにアジールをさがして休息を決めこむほかない。

体を交わした。

体を交わす二人を気も遠くなるような高みから見下ろすガラスの瞳がわたしだった。豆粒のような大きさのカンノが動いている。カンノの動きに応えるわたしが見える。子供の頃、腹を押さえると声を出す人形を持っていた。今のわたしは、あれだった。

薄目を開けてカンノの目を覗くと、そこには剥き出しの困惑があった。この場に及んでシラフであることにお互いが辟易していた。野獣であるべきところに気配りがあった。中途半端の

まま体を離した。

体を交わし言葉を交わして、体と言葉しか交わすものが無いことに慄然としていた。どちらもあり大したものではなかった。何かが欠けている、と思った。愛の烙印を押されたプリズムを通して眺めると、人間という生き物のかたちは、あまりにもいびつだった。

家へ戻るなり玄関先にへたりこんだ。ジュリーはきよんとしている。

（荻野アンナ「背負い水」）

これは「お湯をかけて三分のカップラーメンのように」という直喩で言いきれるような、「わたし」と新進画家「カンノ」との乗りきれない、冷やかな、短期速成の性交場面の描写だ。この場面の描写を、強いて歴史を作者にした文学の作品のおわりのところで、エピソードとして位置づけてみる。すると、東京の二五―二九歳の女性の未婚率約四三%（全国平均約三二%）、三〇―三四歳の女性では約二一%（全国平均約一一%）という欧米なみの高率になった「現在」の女性たちの冷やかさとむすびつけるのがいい。また東京の女性の合計特殊出生率が一・二四人（全国平均一・五七人）という世界的にみて驚くべき最低率になっている「現在」とかわらせてもいいとおもう。もっと親切に註釈をつければ昭和四八年（一九七三年）ごろから怖ろしい速度で世界で一、二をあらそう高度社会にはいつて解放感を満喫しはじめた女性の、男性にたいする白けムードと自主的な観察眼を風潮として背景に背負っていると言いたくなってくる。こういった女性の性的な白けに抗う力は男性の「現在」にはなくなっている。

荻野アンナの「背負い水」という作品は、歴史の空孔の内部で咲いている感覚の花みたいなものだ。歴史という作者とは関わりないからこんなむすびつけ方は遊び以上の意味はない。すこし本気でいえばこの作品は、現在の感覚生活のリアリティを隔ずみまで緊迫させようとしている度合だけ描写がフィクションになっているのが特徴だとおもう。もちろんこの作者の他の作品でもおなじ特徴が貫かれているから、たぶんこの作家の本質ということだ。フィクションを作ることがイコール文学だということにすれば、感覚の緊迫したリアリティを保つためにこしらえあげてしまったフィクションが、この作家の文学だということになる。男がいるから女の感覚があるというのではなく、女の感覚として円満具足している世界が花をひらいていて高い未婚率と低い合計特殊出生率と、眼にみえないところで歴史的な握手を交わしているとおもえる。わたしは男流批評家なのでとくにそう感じるが、この作品の主人公「わたし」みたいな「現在」の女性に、男性がちょっかいを出しても、さあ責任をとってくれなどと金輪際言いそうもないし、男性の方も某総理大臣みたいに三本指を出す必要もないだろうと想像できて、爽やかな印象をあたえる。ただ健康な感覚とか正しい倫理とかいうものは「現在」では瀕死の床にある。治療の方法が見つからなくて、歴史の医院は途方にくれているのだとおもえる。健康な感覚や正しい倫理にたいしては眉につばをつけた方がよくなってしまうのだ。感覚のリアリティと緊迫感がこの作家のフィクションだとすれば、このフィクションの裏側には、性交を不可能にするような病氣の世界がひらけているような気がする。

だからといって弟を男として愛したという訳ではなかった。弟の性別にこだわったことなどなかった。別に弟が女だったとしても、何も変わらないと思う。恋愛の始まりの部分はとても短い。すぐに恋愛の渦の真ん中に落ちていってしまう。そうなると、もう引き返せなくなる。肉体的な関係の行き違いが気持ちいを濁らせたり、お互いの優しさを競争で計り合うようになる。夫との時もそうだった。でも弟とわたしは男と女ではなくて、弟と姉なのだから、これ以上どこにも落ちていく必要もなかった。ずっとこのままでよかった。恋愛が始まる時にやってくる、完璧な安らぎをいつまでも味わっていればいいのだ。ずっと始まりにいるのだから、わたしたちには終わりが無いような気がした。永遠を信じられそうな気がした。——いつまで？——という悪魔のようなささやきを一生懸命に踏みつぶした。そのささやきを本当に聞いてしまつたら、——弟が死ぬまで。——と、答えてしまひそうだったからだ。

う簡単な一言で、二人の間を全部片付けていただろう。彼がこの病室に入ってきて初めて、わたしは弟という人間と出会ったような気がした。

(小川洋子「完璧な病室」)

この弟は二一歳の若さなのに白血病のような死病にかかり入院している。そしてしだいに透きとおった昆虫のように瘦せおとろえてゆく。「わたし」は、その病院でアルバイトの秘書をしているのだが、勤めがおわると夕方から弟の病室に付き添って寝起きしながら看病している。そんなシチュエーションになっている。父母は離婚したあと、母はこころの異常をきたして事件にあり変死し、いまは姉弟ふたりきりになっている。

「わたし」は弟にたいして姉弟相姦的な愛情をもっていて、弟が回復できない死の床にいても含めて、この弟とのあいだの愛情が、起伏も濁りもないかわりに、いつまでもつづく愛情のようにおもっている。この引用の箇所もそうだが、この作家は感覚のリアリティの緊迫性ではなく、こころと思考の表白のリアリティを保存するために、いくらか異常な愛情のシチュエーションを作り、それがフィクションをつくる必然の理由になっている。いいかえればこころの動きのリアリティと真実さを描くためにつくっているフィクションが、この作家の文学の生命だといっている。たとえばこの作家の「シュガータイム」では、「わたし」と男友たち「吉田さん」の関係は、「手を握ったり、抱き締め合ったり」するが、それは眠りの儀式であって、ふたりのあいだは不能な性で満ち足りているように設定されている。また義母の連れ子である弟の航平は脳下垂体障

害でいつまでも小児のような成長しない身体をもち、その代りに天上的な資質のまま新興宗教の修行者になつてゐるように設定されている。「妊娠カレンダー」では、七週と三日目にはじまり、二一週と三日目におわつた悪阻のあいだに、食欲異常と嗅覚過敏でほとんどこころの病氣にかかつたような妊婦の姉の生態を描写する「わたし」の日記に力がこめられている。この作家はこころの動きの真実とリアリティを描くモチーフのために、登場人物のどこかに異常な生態を設定し、また登場人物のあいだに交される会話も、こころのリアリティを描きたい欲求に強いられて、とくに実際にはありえない言葉のやりとりが作られたりする。

この作家も歴史を作者にした現代小説とかかわるよりも、歴史の空孔にひそんだ「現在」のアジールのなかで表現のいとなみをやつてゐるといった方がいい。でもこの論稿のために無理に歴史という作者とむすびつけようとすれば萩野アンナとおなじで、世界に冠たる日本女性の未婚率の急増とか、欧米なみの低い合計特殊出生率とか、昭和五五年（一九八〇年）以来、一・五倍くらいはね上つた遊びや趣味のための消費時間の増加とつながる背景をもつてゐると言うほかありえない。

新鮮な果物みたいなふたりの女流作家の作品に通底するものはなにか。そのうちで、わたしの関心をひくのは、作品に流れる性の意欲の薄れと多様化だとおもえる。もつと別の言い方をする、性交にまで凝集することを無意識に忌避するかわりに、性の意識は分散し多様になり、異常のちかくまでいけるような境界性を描いていることだ。そして作品に描かれていることは、何らかの意味でじつさいに存在することの表象だという側面に集約すれば、この作家たちはやはり歴史

がつくった物語の空孔のところに、自我やエスが生きにくそうに生きている生態をつかみだしている女流の旗手の資格をもつといっている。どうしてこんなことになってしまったのかと、作品のなかで自我やエスは頭をかかえこんでいる。すこしでもリアリティを保とうとして緊張の状況がつづく、感覚であれこころの動きであれ、突っ張って病気に近くなってきたきわどい部分からフィクションに転化してしまうのだ。またフィクションが文学ということだとすれば、文学はそんなところで、やっと生きのびている気配がしている。

いま東京の女性のところに過去の履歴を与えて一〇〇人だけ登場してもらおうとする。一〇年くらい前には「女性は結婚したほうがよい」と答えたのは頭越しに数えて六六人くらいはいた。いまでは三二人くらいになっている。また一〇年くらい前には「結婚しなくてもよい」と答えた東京の女性は二五人くらいだった。いまでは「どちらでもいい」とかんがえている女性が六六人くらいはいる。このどちらでもいいは、「現在」のフィクションの帯域をつくっているのだとおもえる。

2

ここで「現在」の文学の東京チャンピオンであり、東京チャンピオンということとは、もしかすると世界ランキング三位までに入るかもしれない村上春樹のひとつの小さな作品に登場してもらおう。さきに登場した女流二家の作品と似たシチュエーションをもっているからだ。ふさわしい例として「TVビープル」という九〇枚くらいの作品をとってみる。そのまえにまったく非文学